



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2019年7月19日発行 第15号

例年なら梅雨明けが間近に迫っているはずですが、注意しなければならないのが梅雨終盤の集中豪雨による災害です。出雲地方は近年、幸いにも大きな災害に遭遇することがありませんでしたが、他地域の様子から極端な気象状況が予想され、油断大敵の精神で備えを万全にしておく必要があります…。

最近の国際情勢において大きく報道されているのが、隣国とのトラブルがより深刻化している様子です。お互いがのりし合う姿は、子どもたちには見せたくないのですが、そういう時にこそ、当事者の方々は、劇場にでも行っていい音楽に触れ、心を清らかに落ち着かせることが大切のように感じます。西洋音楽はミサ曲が原点ですので、深く心を癒してくれることと思うのですが…。

◎ 定期演奏会が盛大に終える！

本アカデミーの大きな事業の一つである、「出雲フィルハーモニー交響楽団 第23回定期演奏会」が開催され、先般、成功裏のうちに終えることができました。今年のテーマは、令和元年ということもあり、「日本」に目を向けたことと、「グレート」にちなんだ作曲家によるコンサートとなりました。

「日本」の作曲家では、“山田耕筰”と“芥川也寸志”による管弦楽作品です。山田耕筰といえば「赤とんぼ」に代表される日本歌曲が有名ですが、管弦楽の上演は珍しく、《序曲二長調》は興味深く鑑賞された方が多いのではないかと思います。芥川也寸志は、文豪“芥川龍之介”の三男として生まれ、幼少のころから音楽にのめり込み、小説ではなく作曲家及び音楽解説者として活躍されました。戦後に発表された出世作《交響管弦楽のための音楽》を生演奏で聴けたことがとても珍しいことでした。今回は、邦人作曲家を見直すとても良い機会となりました。

「グレート」にちなんだ作曲家は、英国「グレートブリテン」出身の“ベンジャミン・ブリテン”。作品は《青少年のための管弦楽入門》で、普段はナレーション入りの楽曲で親しまれていますが、今回は演奏のみの上演となりました。各楽器の演奏がとても難解で、聴きどころがたくさんある管弦楽曲ですが、出雲フィルの皆さんの演奏技術の高さがうかがえ、会場からもいつまでも拍手が鳴りやまぬほどの盛況ぶりでした。もう一人は、「グレート」の副題がついた交響曲を作曲した、“フランツ・P・シューベルト”。作品は《交響曲第8番ハ長調 D944「ザ・グレート」》で彼の遺作としても有名です。演奏時間が1時間近くある4楽



章の大曲で、普段は繰り返しをカットするなどして演奏されますが、今回はすべて繰り返しを演奏。シューベルトの描いた通りの解釈に基づき上演され、美しいメロディーとオーケストラの二管編成が醸し出す独特の音色に酔いしれ、時間が経つのも忘れるほど、クラシック音楽を堪能できたことと思います。

出雲フィル定期演奏会の特徴は、公演に併せてセミナー形式で広く公募し、集まった演奏家達が中井芸術監督（指揮者）のもとで、楽曲や演奏法について学ぶことができ、自己の演奏技術を少しでも高めようとする意欲が、リハーサルをより密度の濃いものに行っていることです。3日間のセミナーを聴講しましたが、芸術監督の的確な指摘もあり、本番が近づくにつれ演奏者の理解が深まるのがよく伝わり、見事なアンサンブルに仕上がっていく様子を肌で感じられたことは私にとってとても貴重な体験となりました。演奏者同士の絆が深まったことで、本番の演奏は言うまでもなく素晴らしいコンサートとなりました。聴衆の皆様からも様々なご意見をうかがうことができました。コンサート当日に直接お聞きした感想を一部ですが紹介したいと思います。

- *ロビーコンサート（弦楽四重奏）で、初めて弦楽器を間近で聴いたけれど、こんなに素晴らしいものとは…。とても信じられないくらい感動しました。
- *クラシック音楽公演は初めてでしたが、これほどスケールの大きなものとは想像だにしていませんでした。すごかったです…。
- *同じ芸術でも音楽はたくさんの方が集まって創りあげていくことを目の当たりにして、コミュニケーションや絆の深さが伝わりました。美術芸術は、個との戦いなので…。
- *3年間出雲フィルハーモニーの公演に参加していますが、年々オーケストラとしてのクオリティが高くなり、演奏していてもとても遣り甲斐を感じています。

来年の第24回定期演奏会は、ベートーヴェン生誕250年の年回りとなりますので、ベートーヴェン特集で開催予定です。是非、来年も会場へお越しいただき、オーケストラの醍醐味を味わっていただきたくお待ちしております。

◎ 素直な心と切り拓く精神力が学ぶ側の基本です！

学ぶ側の基本は、まず「素直な心」が大切です。指導者からいろいろなことを吸収してこそ一人前に近づくことができます。しかし、吸収するだけでは成長しません。そこから自分自身の質を高めるための努力が必要です。このような学ぶ側の教えを説いた能作者がいました。室町初期に活躍していた“世阿弥”の教えです。

『守』～指導者の教えを忠実に守って、基本をしっかりと身につける。

『破』～学んだ基本に変化をつけ、自分のオリジナリティを加える。

『離』～指導者から独立して自分の道を切り拓く。



本アカデミーでも幼児から大人まで、多くの受講生が学んでいます。学んだことを自分のものにするためには“世阿弥”の教えが現代でも通用すると思います。素直な心で基本的なことをマスターできたら、次は自分自身への挑戦が始まります。しかし、現実にはこの自己を高めるのに最も必要なチャレンジ精神が希薄になっているような気がします…。何のために学ぶのか、もう一度原点に振り返ってみることも必要かもしれません…。

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】